

第27回 記者懇談会実施概要

1 日 時 平成15年2月20日(木) 15時～

2 場 所 ソシオネットワーク戦略研究センター 6階
R C S S ・マルチメディア・ラボ

3 内 容

(1) 研究発表 (15:00～15:40)

・鶴飼 康東 ソシオネットワーク戦略研究センター長・総合情報学部教授

発表テーマ「銀行業情報システム投資の経済分析」[資料1](#)

・荒地 良典 工学部助手

発表テーマ「大型放射光を用いた電池材料開発

ーイオンの動きとミクロな構造との関係を探るー」[資料2](#)

(2) 質疑応答 (15:40～16:00)

(3) 学内状況説明・情報交換 (16:00～16:30)

ア 2003年度入学試験(A・S・C日程)の結果

並びに後期(B)日程の実施について [資料3](#)

イ 大学入試センター試験の導入について

ウ 鳥越俊太郎氏の社会学部教授就任について

エ 長沖一関係資料の拝受について [資料4](#)

オ 「高大連携推進連絡会議」の設置について [資料5](#)

カ インターファカルティ教育「生涯スポーツ・身体運動文化コース」の

設置について [資料6](#)

キ 「特色ある大学教育支援プログラム(COL)推進会議」の設置について [資料7](#)

ク 「現代日本のファッションと社会」の開講について [資料8](#)

ケ 公開シンポジウム「教育改革のながれを読む」の開催について [資料9](#)

コ 関西大学法工連携公開講演会「知的財産セミナー」の開催について [資料10](#)

サ 関西大学特別公開講座「関西中小企業の活性化と経営革新セミナー」の

開催について [資料11](#)

シ 永田眞三郎学長の大学基準協会法科大学院適格認定検討委員会

委員長就任について [資料12](#)

4 大学側出席者

永田眞三郎学長、藤田武良副学長、大和正史学長補佐、鶴飼康東ソシオネットワーク戦略研究センター長・総合情報学部教授、荒地良典工学部助手、中尾正司企画室長、藤本清高広報課長

5 参考資料

(1) 鶴飼康東編著『銀行業情報システム投資の経済分析』(多賀出版)

(2) 関西大学FDフォーラムVol.4

(3) 大学の授業研究ビデオシリーズ第4巻ー実験篇「材料工学実験」ー

(4) 平成14年度インターンシップ報告書

(5) インターンシッププログラム2003

(6) エクステンション・リードセンター2003年度講座案内

(7) 飯田紀彦著『ゆれ動く若者と家族ー現代芸術からのメッセージー』(関西大学出版部)

(8) 関西大学経済・政治研究所 ソシオネットワーク戦略研究センター 竣工パンフレット

以 上

銀行業情報システム投資の経済分析

ソシオネットワーク戦略研究

センター長・総合情報学部教授 鵜飼康東

本プロジェクトは情報技術革命の進展する現代日本の銀行における情報システム投資を実態的に説明し、かつ理論的に検討し、さらに統計的に分析する政策系では珍しい巨大プロジェクトである。銀行業におけるこの種の包括的研究は世界初であろう。期間は1997年から2006年までの10年間、総予算は7千万円にのぼる。

表題から見る限り、本プロジェクトは「日本版金融ビッグバン」の時流に乗った応用研究と見なされるかもしれない。しかし、もともとわれわれのグループ「情報システム投資研究会」は計量経済学者と電子計算機技術者を中心にして1994年に発足した理論的研究集団である。その目的は、各企業のミクロデータに基づいてコンピュータのハードウェアおよびソフトウェアの現代経済に及ぼす影響を測定し、経済理論のフロンティアを切り開くことであった。たまたま、1997年11月に山一証券株式会社の自主廃業決定や北海道拓殖銀行の経営破綻が生じて、銀行の破綻、一時的国有化、買収、および合併が相次ぐなかで、にわかになわれわれの研究が応用的側面から脚光を浴びることとなった次第である。

さて、われわれの研究の成果は、日本の金融技術革命に対する世俗の悲観的予想を覆すものである。すなわち、われわれの郵送アンケート調査および公開財務諸表データをもとにすれば、コンピュータのハードウェアとソフトウェアを合計した投資が銀行の市場価値に及ぼす正の効果はかなり大きい。その数値は好況期の米国製造業における効果と大差がない。また、有価証券報告書の公表データによる一人当たりの分析でも、ほぼ同様の結果が得られた。

したがって、日本金融業の設備投資は情報技術革命に決して遅れをとってはいない。

鵜飼康東（うかい やすはる）

所属・資格・職名：総合情報学部教授・ソシオネットワーク戦略研究センター長

現在の専門：IT戦略研究

研究・教育歴：一橋大学経済学修士 1972年

関西大学経済学部専任講師 1975-1980年

大阪大学社会経済研究所非常勤講師 1978年

関西大学経済学部助教授 1980-1994年

ハーバード大学経済学部フルブライト研究員（指導教授 D. W. Jorgenson）1981-1983年

オックスフォード大学セント・アントニーズ学寮シニア・アソシエート 1989-1990年

関西大学総合情報学部教授 1994年-

関西大学ソシオネットワーク戦略研究センター長 2002年-

大型放射光を用いた電池材料開発

—イオンの動きとミクロな構造との関係を探る—

工学部助手 荒地良典

電池材料の研究は、近年のエネルギー需要や環境問題に関連して、ますます盛んに研究されている。効率よくクリーンに発電することは、省資源と環境負荷の低減につながる。また、発電した電気を効率よく利用することは、省エネルギーにもつながる。固体でありながら高速でイオンが走り回る物質を扱う学問分野を固体イオニクスと呼んでいるが、新しいエネルギー変換材料開発に欠かせない。その成功例としては、リチウムイオン二次電池の実用化が挙げられる。最近では、民生用の小型電池ばかりでなく、電力貯蔵用電池、電気自動車用電源などの開発が求められている。我々は効率的な発電システムである高温固体酸化物型燃料電池、および高いエネルギー密度をもつリチウムイオン二次電池について、性能向上に向けた基礎研究を行っている。特に、電池材料の結晶構造変化について、電池性能と関連させて詳細に検討している。世界最高性能をもつ大型放射光施設 (Spring-8) にて得られた興味深い研究成果について紹介したい。

<プロフィール>

1996年三重大学大学院工学研究科修士課程資源化学専攻を修了。引き続き同大学院博士課程材料科学専攻に進学後、98年中退、本学の助手に就任。専門は固体化学、とくにイオン伝導性セラミックスの合成、構造および電気化学的性質について研究されている。2000年に燃料電池 (SOFC) 用酸化物イオン伝導体に関する研究により、博士 (工学) の学位を取得。SOFCは、環境特性に優れた次世代の新しい発電システムとして期待されている。